埼玉学園大学・川口短期大学　機関リポジトリ

<Educational Report> Music Teaching Practice in the Training of Early Childhood Educators and Elementary School Teachers Focusing on the Cooperative Nature of Music

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-02-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 尾見, 敦子 メールアドレス: 所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/481

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

実践記録

音楽の協同性に着目した保育者・小学校教員養成の音楽授業実践

Music Teaching Practice in the Training of Early Childhood Educators and Elementary School Teachers Focusing on the Cooperative Nature of Music

尾　見　敦　子
OMI, Atsuko

1．はじめに

本稿は、本学2016年度前期の「アンサンブル」の授業実践報告である。本科目は保育者・小学校教員養成のための音楽科目である。幼稚園教育要領と保育所保育指針は、表現領域のねらいを「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする」と定めている。幼児の教育は「幼児期の特性を踏まえ、環境を通して行う」ものであるから、人的環境としての保育者自身の「豊かな感性や表現力、創造性」の涵養は、養成校の音楽授業における重要な課題となる。

保育者をめざす学生には童謡のピアノ伴奏や弾き歌いの技能の習得が求められている。しかし、その技能が実際に保育室で子どもたちとの「音楽的コミュニケーション」として確かに機能するためには、個人の演奏技術の習得、つまり特定の歌唱教材の伴奏が弾けるようになることだけでは十分ではない。児童や幼児の音楽教育において、教師・保育者が子どもたちに音楽を一方的に教えるのではなく、子どもたちといっしょに音楽を創るのだという考え方を持てることが極めて重要である[1)]。ただ、独奏楽器であるピアノの学習過程で、この考え方を体得したり、童謡のピアノ伴奏をしながら子どもたちの（模擬的にクラスの学生たちの）歌声を聴き、目を合わせ、心を通わせるというスキルやセンスを獲得することは難しい。ピアノの既習経験がなければなおさらである。

本科目は３年次に置かれた選択科目である。受講者はピアノの履修を終え、実習の準備を通して将来の職業選択に向かう時期に当たる。教師・保育者は子どもたちといっしょに音楽を創っていく存在であるという考え方に共感し、受け入れる素地があるだろう。音楽は本来、そこに参加する「全員」の能動的で協同の営みである。音楽によって参加者の「人間的な結びつき」を強めることができる。「アンサンブル」の授業では、音楽の原点に立ち返った授業を行うことをめざしてきた。「音楽の協同性の喜び」を味わうという視点から、様々な音楽活動に取り組んできた。特に、だれもが持っている声で「歌う」こと、身体をリズム楽器として鳴らすリズム・アンサンブルを重視してきた。それらは既習経験に関わりなく、同じスタートラインに立って楽しめる音楽活動であるからだ。

集団の中で講義を聞くのと違い、自立した個が求められ、生身の人間同士が互いに心を開き、聴きあう、声を合わせるという行為は、学生にとって「非日常」的なことであり、それほどたやすいことではない。音楽は能動的な創造行為であるので、学生にとっても教師にとってもモチベーションが鍵となる。どんなに小さい曲であっても音楽として響かせ、音楽的な満足を得るには、個人的な音楽的技能の総和

キーワード：音楽の協同性、保育者・小学校教員養成、アンサンブル
Key words ：Cooperative nature of the music, early childhood and childhood educator training, ensemble

だけでなく、意欲、集中力、省察力、根気と忍耐、協調性、リーダーシップとフォロアーシップといった人間力も必要となる。時間を共有することが大前提だが、実習でメンバーが欠けることもある。そのような中で、毎回の授業で演奏が高揚する瞬間や場面があり、それによって「人間的な結びつき」を強まったことを実感し、学生とともに作り上げる楽しさを味わうことができたと思う。今年度の授業を以下に報告することとしたい。

２．授業の概要と受講者の状況

シラバスの授業概要にはこう記した。

> 声やさまざまな楽器の演奏法やアレンジの方法を学び、アンサンブルを習得します。
> 自然の中の音に耳を澄ませたり、身の回りにある音の出るものを探したり、それらをもとにグループで音楽づくりをします（アンサンブルの創作）。その他、提示したものの中から、メンバーの興味や関心に応じてさまざまなアンサンブルを楽しみます。

到達目標は以下の４点を掲げた。

①声や楽器によるアンサンブルの楽しみを味わい、音楽的感性を高める。
②互いに聴き合い、心を通わせて音楽を創り上げていく喜びを味わう。
③合唱を通して楽譜を読む力を習得し、合唱や器楽の技能を向上させる。
④演奏発表する喜びを味わう。

演奏発表の場を設定することを重視し、活動ごとのまとめの発表と授業全体のまとめの発表を設定した。④は①～③を促進させる。具体的には、演奏者と聴衆の双方の役割を経験する、録音・録画して視聴する、演奏を振り返る時間を設けるということを行った。

授業計画には、声のアンサンブル、言葉とリズム楽器でアンサンブル、日本の楽器でアンサンブル（和太鼓やお囃子）、リコーダーでアンサンブル、トーンチャイムでアンサンブル、オルガニートでアンサンブル、を挙げた。これらの音楽活動の中から、到達目標を達成するための最適な音楽活動を、常に目の前の学生の関心と音楽的能力のレディネスに配慮しながら選び出し、教材と教授法を具体化する。受講人数と楽器の台数を考慮して組み合わせや順序を考える。教師の働きかけに対する受講者の反応によっては設定や教材を変える。このあたりが講義科目や技能習得科目とは状況が異なっている。計画の変更があるというシラバスの但し書きの意味を、初回に受講者に伝えている。

受講者は27名で、４年次生が２名、３年次生が25名、男子学生が５名、女子学生が22名であった。取得予定の資格・教員免許については、保育士資格が25名、幼稚園教諭が３名、小学校教諭が６名であった。教育実習、その他の事情による欠席があったが、総じて出席はおおむね良好であった。

受講動機は、「音楽好き」「楽器を使った合奏や合唱が楽しそう」「読譜力をつけたい」「リズム感覚をつけたい」「子どもに楽しんで教える技術を学びたい」等であった。「読譜力やリズム感覚をつけたい」という受講動機はもっともである。小学校や中学校の音楽の授業で系統的な読譜教育がなされていないからである[2)]。受講者の77％（21人）が、合唱の学習歴（小学校から高校まで）があるが、学校音楽では〈初めから歌詞で〉歌い、〈耳で覚えて〉歌うので、楽譜が読めるようにならない。本科目の受講者の半数強が大学に入って「初めてピアノを学ぶ」学生であり、受講者の半数弱が「ピアノが好きではない」という。ピアノ学習の前に「楽譜」が立ちはだかっていることは想像に難くない。本科目でも「楽譜」を用いるが、読譜は手段であって目的ではないことをしっかりと理解させる。音符は符号であって音ではない。符号から生きた音楽表現を創出するプロセスに意味がある。音楽を鳴り響かせ、それを聴き、味わうことが大切である。その結果、音楽が好きになり、音楽を通して人間的結びつきが強まるように導く。これが教師の仕事である。したがって、合唱においては音の高さやリズムを頭の中で思い浮かべ、互いに声を聴き合って正確な音程関係を創りだすことを意識的に行う。どのような音を生み出したいのかというイメージを共有し、創造行為に参加しているという意識を持たせるようにする。

3．授業の流れ

全15回の全体の流れを表1にまとめた。リズム・アンサンブル、わらべうた（斉唱、２声の合唱作品、リズム・オスティナート付きの合唱作品）、トーンチャイム、和太鼓の４つのジャンルを組み合わさって進行していくようにした。わらべうたは斉唱、カノン、リズム・オスティナート、リズム楽器を加えたり、合唱曲として作曲されたものを歌った。表中に示したもの以外のわらべうたも歌い、わらべうたの合唱の演奏の鑑賞も行った[3)]。表の①から⑥は、最終時の授業内発表会で歌ったもので、授業で取り上げた順に記した。

各ジャンルの最終時にまとめの演奏を行い、録音して聴くことで演奏発表の振り返りを行った。第11回までは、パートに分かれての練習は行わず、全員が同一空間で同一の楽曲を経験した。全員がすべてのパートや楽器を経験することで、自分が楽曲の一部ではなくすべてに参加しているという意識が育つようにした。全パートを体験しながら、つねに他パートを聴くことや、楽曲全体の構造を理解することを促した。第12回～第14回はトーンチャイムと和太鼓の選択肢を設けた。このジャンルの設定に当たっても学生に提案し、希望の高いものを選び、学生の希望に従ってグループ分けを行った。トーンチャイムは２グループに分かれ、学生たち自身の力で新曲に取り組んだ（本学にはトーンチャイムの基本セットが２セットある）。一方、和太鼓グループには、和太鼓のリズムと演奏法を口で唱える口唱歌（くちしょうが）をマスターさせ、演奏技能の基本とアレンジのためのアイデアを伝授した後は、学生たち自身で練習を進めるようにした。最終回は授業内発表会とし、各ジャンルの楽曲の演奏の総まとめと全体の振り返りを行った。なお、学生は毎時、出欠確認を兼ねた振り返りシートに感想やコメントを記入し、教師は学生の反応を知るようにした。

授業は毎回、複数のジャンルを意図的に組み合わせた。そうすることで比較・対照でき、それぞれの音楽の性格や特徴が際立つからである。リズム・アンサンブルとわらべうたの合唱を同時並行させることで、音楽的要素の違い（リズムと旋律）、楽器（身体楽器）と声の違い、楽曲の雰囲気の違い、音楽様式の違いが明瞭になり、対照的に組み合わせることで一つの授業の中で変化をもたせることができる。同じジャンルを扱うときは、複数の楽曲、歌唱・器楽・聴取・創作・鑑賞の複数の音楽活動を組み合わせた。難しい楽曲（リズムアンサンブルやわらべうたの合唱）は、少しずつ区切って練習し、ゲーム的要素を加えたり、楽器に置き換えた演奏をグループ

表１　全15回の授業の流れ：ジャンルと曲名

<table>
<tr><th>ジャンル
回</th><th>A　リズム・
アンサンブル</th><th>B　わらべうた
（斉唱・合唱・楽器）</th><th>C　トーンチャイム</th><th>D　和太鼓</th></tr>
<tr><td>第１回</td><td rowspan="7">「クラッピング・
カルテット」
(*1)</td><td rowspan="8">①くもはあっぱい（斉唱）
②いもにんじん
（リズム・オスティナート付きの合唱曲）
③いちべえさんが
（唱え言葉と旋律の合唱曲）
④あんたがたどこさ（２声の合唱曲）
⑤てんやのおもち（２声、手拍子付きの合唱曲）
⑥ほーらほら＋あんたがたどこさ
（二つの歌を重ねる）
※鑑賞（わらべうたのアカペラ合唱）</td><td rowspan="3"></td><td rowspan="11"></td></tr>
<tr><td>第２回</td></tr>
<tr><td>第３回</td></tr>
<tr><td>第４回</td></tr>
<tr><td>第５回</td><td rowspan="3">茶色の小びん（*2）</td></tr>
<tr><td>第６回</td></tr>
<tr><td>第７回</td><td>◎まとめの演奏</td></tr>
<tr><td>第８回</td><td rowspan="7"></td><td>◎まとめの演奏</td></tr>
<tr><td>第９回</td><td rowspan="3"></td></tr>
<tr><td>第10回</td></tr>
<tr><td>第11回</td><td>◎まとめの演奏</td></tr>
<tr><td>第12回</td><td rowspan="3"></td><td rowspan="3">〈選択A〉
きよしこのよる
（２グループ）</td><td rowspan="3">〈選択B〉
八丈太鼓</td></tr>
<tr><td>第13回</td></tr>
<tr><td>第14回</td></tr>
<tr><td>第15回</td><td colspan="4">授業内発表会</td></tr>
</table>

楽譜の出典：(*1)『高校生の音楽１』（平成 22 年発行）教育芸術社、pp.76-77. (*2)『小学生の音楽４』（平成 23 年発行）教育芸術社、pp.42-43. わらべうたの出典は、①町田嘉章・浅野健二編（1962/1989）『わらべうた日本の伝承童謡』（岩波文庫）pp.130-131. ②古澤啓子（1999）『わらべうた 子守歌 仕事唄による女声合唱曲集』p.27. ③本間雅夫（1990）『二声の曲集』全音楽譜出版社、p.53. ④同前 pp.10-11. ⑤本澤陽一『わらべうたによる合唱曲集２』pp.10-11. ⑥同前 pp.16-17.

単位で工夫するなど毎回違う「味付け」をしたり、暗譜を促すようにした。各曲を複数回、繰り返し練習して螺旋的に仕上がるようにした結果、1曲を長い期間楽しむことができ、１時間内のメリハリも生まれた。

教室の空間はかなり重要な要素である。アンサンブルには受講者が互いにアイコンタクトがとれる配置（自分が常に最前列）がよい。受講者数はオープンスペースに学生が横長の楕円の半円形に一列に並ぶことができる適正な人数であった。教室がオープンスペースなので、配置を適宜変えて、ステージと客席を作ったり、動くスペースをとったり、グループ活動のためのスペースに分けたり、講義室のように並んでDVDを視聴したり、と自由に空間を変えることができた。

４．授業実践の結果と考察

最終授業時に、まとめの演奏発表を行ったあと、授業全体を振り返るアンケートを実施した。アンケートの結果をもとに、本授業の考察を行う。授業の到達目標の達成度を５つの観点から検討してみた。

①アンサンブルの楽しさや協同で行う喜びを味わえたか
②音楽の技能や技術が向上したと思うか
③それぞれの音楽活動はどのくらい好きになったか
④この授業でどんな能力が身についた、高められたと思うか
⑤わらべうたが好きになったか（楽曲別に）

①～③の結果を図１に、④の結果を図２に、⑤の結果を図３に表した。

図１は、この授業で、音楽の楽しさと喜び、音楽の技能向上、音楽が好きになったか、を表している。「楽しさや喜び」は「すごくそう」と「まあそう」を合わせて93％（27人中25人）、「音楽の技能向上」は82％（27人中22人）であった。「音楽の技能向上」とともに「楽しさや喜び」を得ていることが重要である。音楽表現の質が高まってこそ、「楽しさや喜び」が得られるからである。「あまり楽しくなかった学生（１名）は「あまり音楽の技能が向上しなかった」と感じている学生である（この学生は音楽が授業前も後も好きで、「発表を通して、人の演奏を美しいと感じることができる心を子どもたちに育てたい」と書いた）。

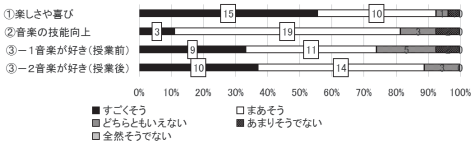


図１　喜びや技能が高まり音楽がより好きになったか

本科目は選択科目なので受講学生はもともと音楽が好きである（66％、27人中20人）。そして、15回の授業終了後、音楽が好きな学生は88％を占めた（27人中24人）。以上のことから、「アンサンブル」の授業で「音楽が楽しい、できる、好き」という学生を育てるという到達目標はほぼ達成されたと言えよう。

図２は、この授業でどのような能力が身に付けることができたか、を表している。

この授業で身についた能力の第１位が「合わせる力」で、本科目のねらいどおりとなった。次に「リズム感」「歌唱力」が続き、次に、「楽器の演奏技能」「コミュニケーション力」「音楽的感性」「聴く力」が続いた。限られた授業期間と回数の中で多くの学生がいろいろな能力を身につけることができた。

図３は、この授業でどのようなジャンルの音楽活動が好きになったか、を表している。

どの音楽活動も高率（85％～100％）で好きになった（「すごくそう」「まあそう」の回答合計）ことがわかった。トーンチャイムで演奏した「茶色の小瓶」

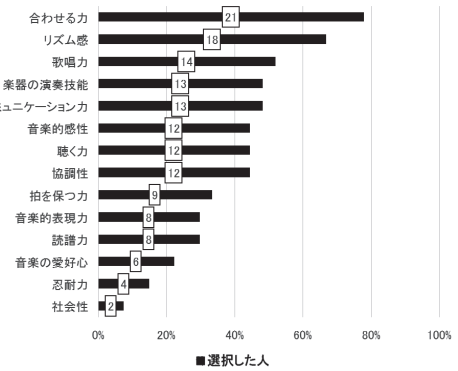


図２　授業で身についた能力

は100％であった。

学生は毎年変わらず、この楽器に対するあこがれと期待を示す。そのため、演奏の出来栄えが良くなければ楽しさは半減する。今年は全員が好きになったというのは喜ばしい。昨年はポップスを取り上げ、満足のいく演奏結果が得られなかった。旋律のリズムを正しく演奏することができず、伴奏も難し過ぎた。そこで今年は学生が経験している小学校の合奏教材「茶色の小びん」を取り上げた。旋律は明るく軽快で、形式がシンプルで（繰り返される二つの対照的な楽節から成る）、伴奏も親しみやすい（基本的な和音進行に借用和音、覚えやすいベースライン、その繰り返し）。小学校４年生の教科書にある合奏の編曲譜をそのまま取り上げた。

トーンチャイムは分担奏なので自分の担当する１～２音（演奏人数と音域等によって３音以上も）だけに注意が集中しがちである。そして旋律の流れを考えずに自分の音だけを鳴らしがちである。自分が担当する音を出すだけでは、音楽的な演奏にならない。間違えずに鳴らせるだけでは音楽的な満足感にはならない。曲全体の構造（旋律と伴奏、曲の構成、曲想など）を理解し、自分の担当する音の役割を知ることが必要である。そうすれば、全体の音響を聴きながら演奏を楽しもうとする姿勢が生まれる。

そのためにもいきなり楽器を持って鳴らすべきではない。譜読みを楽器で行ってはならない。間違った音、拍からずれた音、それぞれが試行錯誤して鳴らす音で、教室は騒音の渦になり、モチベーションが下がってしまうためである。このような練習は非音楽的、非効率なので行わず、楽器を持つ前に、声で合わせるのである。旋律（上声）、伴奏の和音のベース（下声）、ベース以外の和音（中声、２声に分かれる）の３パートから成る合奏曲をアカペラ合唱（楽器伴奏のない無伴奏の合唱）として歌うのである。配布楽譜には階名（英小文字によるレターサイン）を付しておいた。学生はわらべうた（表１の①、④の楽曲）で階名の利点を経験しているので階名ですぐ歌えた。全員を３グループに分け、各パートを持ち回りで歌う。ソルミゼーションを行い、３声部が互いに聴き合って歌うことで、曲全体の構造が理解でき、暗譜もしやすくなった。合唱として歌うことで全体の実際の響きをあらかじめ聴き知っておくことが重要なのである。楽器の特性上、ちょっとしたタイミングのずれによって演奏の美しさが損なわれてしまう。学生には、明確な音の立ち上がり、持続音の適切な処理を行って、和音が揃い、かつ濁らないこと（縦を合わせる）こと、まるでソロで歌うように旋律がなめらかに奏でられること（横を合わせる）を要求した。このようにして比較的短期間で演奏の質を上げることができた。

今年初めて本格的に取り組んだわらべうたが好評であった。受講者の89％（27人中24人）が好きになったと回答した（図３）。歌った曲がどのくらい好きになったのかを表したのが図４である。どれも高い割合で好まれ、全く好きでない曲はなかった。

「すごく好きになった」第１位のわらべうたは「いもにんじん」である（93％）。「いもにんじん」の歌詞は数え歌としてのおもしろさと、まりつき歌として歌詞が累加していく面白さを兼ね備え、形式美を直感できる構造になっている。

「くもはあっぱい」は夕焼けの美しさをうたった高知県のわらべうたである。歌詞は方言が多く含ま

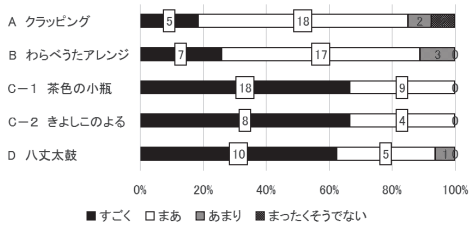


図３　どのくらい好きになったか（ジャンルと曲名）

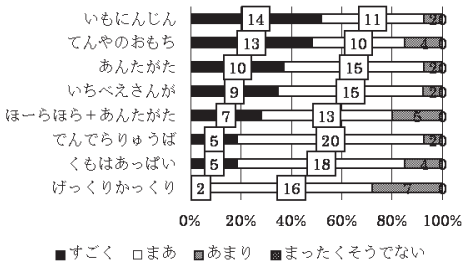


図４　どのくらい好きになったか（わらべうた）

れ、言葉も旋律も独特の美しさがあるのだが、音域が広く、まったくなじみのない歌である。この歌を85％の学生が好きになった。学生に、わらべうたの「音楽としての美しさ」について問うたところ、「この美しさは子どもにとってうけいれやすいものと思えた」「音やリズムに言葉をきれいに乗せているのが美しいと思う」「景色や情景を歌った歌が多く素敵」と感じていることがわかった。わらべうたは言葉と音楽が自然に結びつき、シンプルなリズムと音組織、形式美が特徴である。わらべうたの音楽構造が学生の音楽的感性に響いたのであった。

八丈太鼓は、太鼓の奏法を含んだ「口唱歌（くちしょうが）」（ドンドンドドーン、ドンドンカカカ、等のリズム言葉）を覚え、太鼓を交代で打つ。一定のリズム（ドンドラ）を刻む締太鼓が大太鼓を支える。掛け声で「ソーレッ」と仲間を囃す。音楽の身体性が実感できる活動である。音楽の協同性を直接、身体で味わうことができる題材である。

「クラッピング・カルテット」は高校１年の音楽教科書に掲載されている手拍子（クラッピング）だけでできた４パートのリズム・アンサンブルである（長谷部匡彦作曲）。楽譜には36小節にわたりリズム符だけが並んでいる。２小節８拍単位（４分の４拍子）のリズムユニットの反復が16回のあと４小節の終結部がある、という構成である。１曲の全演奏拍数を数えると272拍である。272拍を全員で等拍を保ち、楽譜を見失うことなく進み、リズム符を瞬時に読んで手拍子を打ち、落ちこぼれることなく曲の最後まで行きつくこと自体が挑戦である。一方、歌わず、手拍子だけという「近づきやすさ」から、最初に取り組みやすい題材でもある。この曲を演奏するに際して、紙に書かれた符号が音・音楽になるプロセスを楽しむようにした。例えば、４つのリズムユニットを覚え、その中から一つを選び、全員が拍を保って、自分のリズムを手拍子をしながら空間を歩き回り、同じリズムを打つ人同士が集まっていくという即興的なゲームを行った。多感覚を同時に働かせる緊張感、仲間を見つけられた安ど感と自信、人が移動して４パートに分かれていく視覚的な面白さ、拍を共有しようとする協同の意志の表れ、手拍子だけ鳴り続ける音響現象、と不思議な時空間が生まれた。それは読譜の先にある、全員参加者の音響創造であった。

読譜は手段であって目的ではない。そのことを、参加者が生み出す音響によって実感することができるように努めた。音符は符号であって音ではない。符号から生きた音楽表現を創出するプロセスに意味がある。音楽を鳴り響かせ、それを聴き、味わうことが大切である。その結果、音楽が好きになり、音楽を通して人間的結びつきが強まるように導く。これが教師の仕事であると考える。

５．おわりに

「アンサンブル」授業は今年も、学生の状況を見ながら、学生とともに毎回作り上げていくものとなった。学生も授業者自身も「音楽の協同性の喜び」を味わうことができた。この授業を通して学生は、子どもと音楽的なコミュニケーションを可能にする基礎体験を得ることができたのではないかと思う。学生たちには、保育者や教師として子どもたちの日々の生活に「音楽の協同性の喜び」をもたらす存在になってほしいと願っている。

注

１）小川昌文（2015）「マイミュージック」を育て、培い、養う音楽授業－授業をクリエイトするために不可欠なもの」『音楽教育研究ジャーナル』vol.12 no.2, 6-19.

２）尾見敦子（2012）「なぜ音楽の授業で読譜力が養われないのかーハンガリーの音楽教科書が物語るもの」『音楽教育研究ジャーナル』vol.9 no.2, 58-65.

３）筆者は2007年４月から2012年10月まで、学生のアカペラサークルの指導を行っており、その演奏音源の中からわらべうたの合唱作品を選んで鑑賞した。尾見敦子（2013）「コダーイ・コンセプトに基づく音楽非専攻学生のためのアカペラ合唱の教育実践」『川村学園女子大学研究紀要』Vol.24 No.2, 15-31.（わらべうた選集のリストはp.29.）